

宇部市の彫刻設置に関する鑑賞教材の活用

上原 一明

How to Utilize Outdoor Sculptures in Ube City as Appreciation Materials

UEHARA Kazuaki

(Received January 8, 2013)

キーワード：宇部市、彫刻、鑑賞、教材

はじめに

教育学部美術教育彫刻講座では、彫刻に関する基礎的な制作方法及び応用、並びに現代彫刻表現についての研究と指導を行っている。学部における彫刻の基礎的な学習については、粘土による塑造制作と石膏取り実習、大理石を用いた石彫実習、石膏サヤ型技法によるテラコッタの制作を行っている。大学院においては、FRPによる胸像制作と石粉粘土によるフィギュアの制作を行っている。また卒業制作に関しては、作品の形体に応じてシリコン取りやFRP、鉄の溶接、木彫制作にも対応している。つまり彫刻講座では、塑造及び石膏取り・FRP取り・シリコン取り等技法、テラコッタ・石彫・木彫・鉄彫刻という実材の制作の研究と指導を実践している。また、彫刻に関する理解は、このような実制作を通して学習することと同時に、彫刻家が制作した作品の鑑賞もまた彫刻理解を深めるために重要である。これまで本彫刻講座では、宇部市の野外彫刻見学を、基礎セミナーや学外研修として既に4回実施してきた。

山口県宇部市は「緑と花と彫刻のまち」を市制方針として、多くの日本国内及び世界的な大型野外彫刻を市街地並びにときわ公園等に設置されており、まさにこの彫刻鑑賞に最適な環境であるといえる。本論は、宇部市内のコースを実際に歩いて彫刻を鑑賞した研修調査を元に、鑑賞分野における宇部市の彫刻設置に関する教材活用について述べる。

1. 彫刻を活用した宇部市の取り組み

宇部市は、ときわ湖に面した公園内にUBEビエンナーレ（現代日本彫刻展）事務局とした緑と花と彫刻の博物館としてときわミュージアムを設立している。1961年から半世紀にわたり野外彫刻展を継続している。

明治のはじめ頃までさびしい村だった宇部は、石炭を掘ることのでたくさんの人が集まるようになり、大正時代には村から町をとびこえて市になりました。戦争で市の中心部は焼け野原になりましたが、市はまちづくりを始め、石炭をエネルギーとして色々な製品を作る工業地帯となりました。しかし、工場の煙突からは灰が降り、暴力団の争い、青少年の非行なども問題となりました。この状況をなんとかしようとして、市、市民、企業、学者が一緒になって努力し、まちは緑と花が植えられ、少しずつ明るくなっていきました。

そんな中、駅前には置かれた小さな彫刻が人々にたいへん安らぎを与えました。このことが、まちを彫刻で飾る運動や彫刻展へと発展し、市内に彫刻が置かれるようになりました。「緑と花と彫刻のまち」宇部のはじまりです。⁽¹⁾

この内容は、炭鉱の街が彫刻の街になっていった経緯を示しており、行政・市民・企業が丸ごとになって取り組んでいる姿がよく理解できる。彫刻展が半世紀にわたって継続されている本当の理由はそこにある。

本格的な彫刻展は1961年の第1回宇部市野外彫刻展から始まり、1963年第1回全国彫刻コンクール応募展、1965年第1回現代日本彫刻展と名称を変え、2009年から第23回UBEビエンナーレ（現代日本彫刻展）となった。展覧会終了後、受賞作品を中心に宇部市街地やときわ公園内に、現在約200点の野外彫刻が設置されている。宇部市では近年、首長の積極的な働きかけにより、彫刻と関連づけた様々な社会活動が展開されており、市内を世界的野外彫刻美術館として整備している。

これまで収集し設置してきた彫刻作品が、実際どこに設置されているのかが一目で分かる、彫刻地図帳のような役割を果たしているのが、「彫刻ウォーキングマップ」である。デザインも親しみやすく、街歩きも楽しみながら彫刻を鑑賞できるので、利便性が高い。

1-1 「彫刻ウォーキングマップ」の活用

現在、UBEビエンナーレ事務局から二種類の「彫刻ウォーキングマップ」が発行されている。蛇腹折りで携帯性に優れた「うべ市街地」版と「ときわ公園」版の二種類が用意されており、ときわミュージアム並びにときわ湖水ホールで無料配布されている。「ときわ公園」版にはA：野外彫刻エリアに24点、B：正面玄関エリアに23点、C：湖水ホール周辺エリアに19点、D：ときわ湖外周エリアに17点の合計83点の作品が紹介されている。「うべ市街地」版には、A：宇部市全域に46点、B：宇部市中心部に66点、C：宇部市図書館に15点の127点の作品が写真で紹介されている。いずれも作品写真に番号があり、地図上にその配置場所が番号で示されている。

本論では、普段市民が暮らす生活空間に、いかにしてその原点たる彫刻による安らぎを与える効果があるのかを検証するため、宇部中心部並びに宇部市立図書館の彫刻を実際に歩いて鑑賞した。鑑賞コースとしては、JR宇部新川駅から出発し、渡辺翁記念会館、宇部市立図書館、参宮通りの宇部警察署、常盤通り、真締川兩岸、シンボルロード、興産通りという順序にした。時間は10時から16時の6時間である。ときわ公園内の彫刻は比較的巨大で抽象的作品が多いが、宇部市街地と宇部市図書館は比較的の小振りな具象作品が多いことに気付く。そこには自然の風景の中で意味を持つ大型作品と、安全性を考慮した身近な生活環境の中で意味を持つ小型作品とに区別し、設置した意図がうかがえる。

以下、研修の参加者からの意見をまとめたものである。

設置作品について：

a) 設置場所と環境に意味があり、自己と対峙させる作品：

伊藤憲太郎の「SEED 増殖」（1999年）や、河崎良行の「球体フォーメーション」（1997年）にみられるステンレスを用いた抽象彫刻で、映り込みの効果を利用し、見る者を街並みの中に共に取り込み、自己存在を再認識させる。街の指標となりえる。

b) 身近で軽量感のある作品例：

後藤良治「循環・メビウス」（1997年）にみる、人体表現による具体的な人のつながりの造形化。

c) 幾何学的で不可思議な作品：

内田晴之「異・空間」（1987年）にみる、磁力を用いた幾何学的なバランスの不可思議な魅力。

野崎悠子「メンタルスペース、キューブ '73」（1973年）にみる視覚効果による脳認識処理能力の活用。

d) 未来へのメッセージ性：

重村三雄「地球の明日が見えますか？」（1991年）にみる、巨大な恐竜の足の骨の上に乗った小さな哺乳類から想像できる命の力強さ。

e) ブロンズ塑像の純粋な彫刻性：

柳原義達「座る女」（1958年）における、彫刻の素材の持つ神秘性と力量の表出。

作品設置周辺環境について：

f) QRコードの利便性：

作品名のプレート内に設けられたQRコードは、作品に関する様々な情報が取得でき、大変便利である。大

きな作品解説板が不要なので、作品自体の景観が非常にすっきりしている。

g) 彫刻作品のメンテナンス：

野外設置による彫刻作品の劣化や破損も少なくない。故意につけられた傷や、マグネット作品に付着した嗜好品用道具等、興味本位な悪戯の存在も否定できない。

h) 夜間ライトアップ：

昼間の印象と、夜間ライトアップによる印象の差異の面白さ。



1-1-1 交差点に設置された作品「SEED 増殖」



1-1-2 歩道に設置された作品「しぼられたピラミッド」

2. 彫刻設置の必然性と適合性

都市空間における野外彫刻は、そこに置かれる必然性と適合性が問題視される。台湾の花蓮県においても、毎回国際石彫シンポジウム開催と同時に制作される大理石の彫刻が次々と街中に設置され続けており、作者任せで出来上がる彫刻作品の決定された場所に対する設置の必然性はない。事実、完成した作品の高さや量感の形状や、作品テーマに応じて適宜設置場所を決定している。よって、その作品設置場所に対するある程度の適合性は考慮しつつも、決してその場所に設置しなければならない必然性があるとはいえない。一時的な展示ならまだしも、半永久的に設置される可能性が高い彫刻作品であれば、なおさらそこに置かなければならない必然性が要求されよう。しかし理想的には、予め設置場所を考慮に入れた作品を考案・制作することが望ましいが、作家には一定の条件が課せられ、自由で豊かなイマジネーションに制約がかけられる可能性が生ずる。

花蓮市内のある公園内に、必要以上に多くの彫刻作品が設置された場所がある。そこは決して良い空間とはいえない。材質的には大理石で統一されているが、作品内容は作家によって全く異なり、互いに空間を濁すくらいさえある。これはその「作品」と「場」の好ましくない状態であり、安らぎを与える空間とはいえない。方角を含めた作品配置は非常に重要である。

宇部市の彫刻設置が比較的成功的といえるのは、段階を経た設置方法を取っていることが最大の理由である。まず20点の大型作品をときわ公園会場に展示し、受賞した数点だけを比較的その作品テーマや色と形状に合った場所に選定しているという点が挙げられる。約一年間という長いときわ公園会場の展示期間内に、都市計画と同時進行で設置している。比較的的作品と作品との距離は、互いが影響しない程度に配置し、場合によっては金属作品の冷たい材質感を和らげ、逆にその冷たい質感を引き立てるような効果を狙った植樹もしている。また、時々配置変えも行っており、実験的な試みも垣間みれる。最初は必然性がなくとも、長期間そこに彫刻があるとやがては必然的にそこになくてもならないものになることもまた事実である。それもまた彫刻の魅力であるといえる。

3. 野外彫刻の鑑賞の意義

彫刻作品は絵画作品とは異なり、立体的であるため、写真資料による認識は後者と比較すると十分ではない。明確な色彩や表面の細かなディテールの確認まではいかなくとも、平面である絵画作品は、同じく平面である写真資料だけである程度認識できる。しかし、写真資料で表面の素材感は描写できても、彫刻のスケール感や量感は認識できない。やはり直に本物を見たり触ったりすることは、彫刻作品を理解する上で重要な意味を持つ。

しかし、最初写真資料だけで認識していた彫刻作品を直接目の当たりにした瞬間、これまで感じてきたその作品に対する印象が全く異なった、と驚かせることもまた鑑賞教育の重要な方法である。写真による平面的表現は、ある定められたアングルをカメラのレンズを通して撮影された、いわゆるその作品のある一面を表しているに過ぎず、さらに撮影者の演出や撮影時の天気によって様々な表情をする。これら一種の固定観念を経て実際に実物を直に見ると、その作品の量感や形の美しさ、素材の質感や色の変化などに加え、作者が何を意図して作品を制作したのか、と自らの感受性や知識をフルに活用し、感覚的視点と理論的視点で作品を理解することができる。或いは自らの過去の記憶から結びつけられた思い出や情景が、その作品を通して蘇ることも期待される。

作品自体、見る時間帯や天気、季節によって、異なる様々な表情に変化する。白昼の強い太陽光線、情緒的な夕日、暗闇の中の街灯の光、曇り空の柔らかな明るさ、雨でぬれた色、風に吹かれる様子、積雪による白銀の世界。野外彫刻はこのような刻々と変化する環境の中に置かれているが故に、異なる表情を見せるといふ特徴も兼ね備えている。これも鑑賞者に対してその変化する感情に追従する形で、全く新しい世界観と感動を与える。

実際このときわ公園や市街地の野外彫刻をじっくり鑑賞した参加者は、そろって彫刻作品の魅力と設置環境との関係の意味を感じたようである。まず意識して見ることによって、各作品のメッセージ性やその作品と対峙する自己の存在を認識することができる。また実際、作品に触れることで石や木、金属の質感を肌で感じ、バーチャルではない実体感を認識することによって感動する。実体のない情報化社会に慣れてし

まっている現代社会人に必要なのは、実際に目の前にあり、触れることができる自然素材による造形や、視覚的造形の妙技を意識して見ることで、現実を認識する機会を設けることと同時に、オープンエアな場所で多くの人々と意見や感想を述べ合い、多様な彫刻作品と触れ合うことで、自己を再確認することなのかもしれない。

おわりに

宇部市の野外彫刻は、常盤湖を中心とした自然に恵まれた空間に配置された野外彫刻鑑賞と、市街地に点在している野外彫刻鑑賞、幹線道路沿いやインターチェンジ等移動中の車上からも野外彫刻が鑑賞できるという三つの鑑賞スタイルを確立している。これは街の生活空間の中に取り入れた彫刻の有効活用であり、街全体が野外彫刻美術館として機能していることを意味する。まさにこれは現在進行形の生きた鑑賞教材であり、山口県内の学校教育における遠足や、学外研修として大いに活用できる。

これから世界的な彫刻の街としての発展が期待される宇部市の取り組みは、新たな価値観を創出し、更なる展開の可能性を示唆するものである。

付記

本論文は、2012年10月20日に行われた学外研修を中心にまとめた。研修に参加した石堂、小野村、重栖、品川、西澤、屋良の意見を取り入れることで、多角的な視点による評価を提示できた。

参考文献

「宇部の彫刻」宇部市，1993.
上原一明・林永利：「關於活用文化振興政策的日本雕刻發展—以山口縣宇部市為例」，第三屆花蓮學學術研討會論文集，花蓮縣文化局，2011.

参考資料

「うべ市街地 彫刻ウォーキングマップ」ときわミュージアムUBEビエンナーレ事務局，2012.
「ときわ公園 彫刻ウォーキングマップ」ときわミュージアムUBEビエンナーレ事務局，2012.

引用文献

(1) 「ときわ公園 彫刻ウォーキングマップ」ときわミュージアムUBEビエンナーレ事務局，2012.